

オープン カレッジ

中部デザイン協会は、日本で最初に発足したデザイン団体で、今年の1月に国際デザインセンターで「中部デザイン協会創立70周年記念展覧会」が催された。この展覧会に先駆け、2017年12月に「中部デザイン協会の歴史から日本のデザイン黎明期を語る」の講演会を筆者が企画し、故舟橋辰朗氏・宇賀敏夫氏・森本健氏・西村知弘氏の四氏から「教育・行政・産業」をキーワードとした講演会を行った。この講演会から中部圏の産業デザインの、黎明期から近年までの貴重

中部デザイン協会創立70周年記念行事を終えて

年4月に愛知県工業指導所を設立した。そこに商工省工業指導所の2代目所長を退官した、斉藤信治を所長に招いた。工業指導所は「化学課・金属課・木工課・図案課」で構成され、その中でも斉藤は、図案課（今のデザイン）の強化を図った。

次に斉藤は、愛知県のデザイン振興事業を支援する民間組織として、50年12月に愛知県工業設計協会（現中部デザイン協会）の設立に取り組み。発起人には斉藤信治・池田棟一・堀口信造・和田三千穂・児島星吉・安田彦一郎・山口実・早川愛吉・松本政雄・高橋一郎、それに桑原幹根愛知県知事が会長に加わって発足した。これは産業育成には

・家具・陶磁器や日用品などを、幅広い領域に会員のデザイン事例が残る。

次に、その後の協会と行政の関係は、89年の世界デザイン博覧会や世界デザイン会議、95年の世界インテリアデザイン会議、03年の世界グラフィックデザイン会議の、世界3大デザイン会議の開催を協会会員が支援した。

今、デザインの領域は、70年前の黎明期から成長期を経て、成熟期に入っていると思われる。冒頭にあげた展覧会の作品を見ると、日ごろ見慣れた日用品など、さまざまな領域にこの地域のデザイナーが関わっていたことがうかがえる。

その多くが決してデザイナーが名乗り出ることのない、アノニマスなデザインである。しかし、近年のデザイナーの活動や報道は、変わった物や、珍しい物が取り上げられ、デザイナーの技術力と産業技術とのつながりが、見えづらくなっていることが極めて残念である。

デザイナーと産業の

マッチングこそ開発の要

な歴史を知ることができた。

戦後の愛知県は、産業の復興と育成が大きな課題であった。そこで、1950



岐阜大学大学院生活科学部
生活環境デザイン学科学科教授
滝本 成人

行政機関だけでは限界があり、民間のデザイン活動を取り込む狙いがあった。

中部圏のものづくり産業

協会の活動は51年に、第1回工業設計意匠図案懸賞募集を行い、これが全国で初めてのコンペティションとなった。63年には、ニッポングッドデザインショーが開催され、その後12回続が。当時の協会会員の活動は、自動車・バイク・工作機・ミシン・タイプライター・石油コンロ・ガスストーブ・温水器・楽器・家電

は、カーボンニュートラルや産業構造の大変換から、イノベーションの創出を加速している。ものづくりで培った高い技術力と、技術に裏付けされたデザイン力がマッチングこそが、商品開発の要となる。中部デザイン協会会員ならびに法人会員の活動が、中部圏の産業活動の向上につながることを確信している。

たきもと・なりひと 工業デザイン。名古屋工業大学大学院博士後期課程社会学専攻修士。博士（工学）。